魔導書の門番

大田功助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導書の門番

【Ｎコード】
Ｎ５３５４Ｙ

【作者名】
大田功助

【あらすじ】
主人公ミレリア・ハートンはある事件に巻き込まれる。
その時、彼女はある男に会う。その男にある決断迫られる。
それは、彼女の運命変える決断だった。

はじまりの出来事？（前書き）

よろしくお願いします
小説は初めて書くものです

はじまりの出来事？

彼女は戸惑った。ついさっきまで、みんなが盛り上がってた体育祭が戦場になったからだ。
楽しかった生徒の笑い声は、悲鳴や奇声に変わり、教職員はそれを止めることのなく自分たちもこの戦争に参加していた。
そう、今この体育祭は生徒や教職員らの殴りあいに変わってしまったのだ。理由は彼女も分らなかった。
ただ、分ることは、ここは彼女の知る体育祭ではないことだけだった。校庭には返り血が飛び散り、
教職員のテントも倒れてしまった。すでに何人かの生徒は気を失ったり、倒れたりしていた。
「こんなのどうして・・・みんなしっかりしてよ」彼女は泣きながらみんなに叫んだ。しかしみんなの奇声や悲鳴の声で彼女の言葉は届かなかった。そもそもこのような彼らの狂気の前で例え彼女の声が聞こえたとしても、彼らの心に届くかはかなり難しかった。彼女の訴えも意味なく、殴り合いはさらに激しくなった。またひとり、またひとりとどんどん倒れていった。その中に見覚えある女の子がいた。茶髪の彼女にいつも隣についてくる姉妹のように仲良かったレニュちゃん！
彼女は急に顔を青ざめてレニュちゃんに駆け寄った。「レニュちゃんしっかりして、どうしたのレニュちゃん」彼女は必死でレニュちゃんの体を揺する。しかし冷たくなった彼女の体に触れたとき、彼女の顔が歪んだ。初めての人の死、初めての友達の死、手を握ると温かいぬくもりは冷たく変わってしまった。
きれいなピンクの髪の毛ぼさぼさになり、目には生気がなかった。
彼女は友達の死が衝撃過ぎたのか、校庭で吐いた。そして自分もこの汚物のように、吐きだされたいと神様に願った。しかしその願いも生徒たちの狂気や奇声でかき消された。彼女はもう半ばこの状態

を収拾をあきらめたとき、一人の冷たい男が立っていた。

はじまりの出来事？（後書き）

いろいろと文章的におかしいところがあったら教えてください
後、感想とかも書いてくださると幸いです

はじまりの出来事？（前書き）

二作目です
かなりごり押しです
誤字、脱字など見つけたら教えていただけると幸いです

はじまりの出来事？

そのとき、一人の男が彼女の前に立っていた。その男の黒いコートを着ていて、学校の関係者ではないのは一目了然だった。また、教師のように温厚なイメージはなく、むしろ殺人者や暗殺者ような刃物ような寒気を彼女は感じた。男はこの戦場のような体育祭を前に少しも気にせず、彼女のほうに歩いてきた。男の暗くするどい目は彼女に向けられた。その時、彼女は、直感的にこの男が体育祭を戦場変えたと感じた。またこの男をここで始末しなければならないと悟った。彼女は近く落ちてあった。金属バット拾い、男に大きく振りかぶった。しかし、男は金属バット避けず、片手で受け止めた。まるで、何事もなかったように、「とても興味ぶかい。この結界の中にいながらこの結界の干渉を受けてない・・・・君は一体何者だ？」暗く低い声で、彼女に男は問いた。彼女は、憎悪の目を男に向けて「あなたこそ誰よ！こんな楽しい行事を戦場に変えて、何がしたいのよ！」涙を流しながら彼女は男に訴えた。男は、少し困った顔をして「それは誤解だ。私はここに結界なんか張ってはない」彼女に言った。「なら、誰がこんなひどい事をしたの？」「魔術師だよ。」「魔術師？」彼女は現実味のない答えに聞き返してしまった。男はそれが面白かったらしく苦笑して「そう、魔術師。理から外れた悪魔の叡智を司るものだよ。」「なるほど、魔術師なら結界とかも張れるね」彼女もさっきよりは、冷静さを取り戻してたのでこの男の話をだいぶ理解することができた。彼女はさっきような憎しみはなかったが目で男を睨みつけながら「単刀直入で聞くよ。あなたも魔術師なの」男は無表情で「そうだ。魔術師だ。」と彼女に言った。彼女はまた男に「あなたは本当に学校に結界を張ってないのね？」同じことを尋ねた。「有無、この結界は作りがいいが秘匿が甘いな。私ならもっと完璧な結界を作る自信はある」無表情で男はつぶやいた。もともと結界とは、現実を魔の術で仕切り、異界を作り

あげる。異界に入ったものはその世界の住人ならなけらばならない。例えば、この結界は狂化と生贄で構成されている。なのでこの校庭にいる生徒は、狂いながら力尽きるのは、そのためである。「なら、あなたはここに・・・・何しに来たの？」彼女のその問いを男が待っていたように冷酷に笑いながら「悪い魔術師を懲らしめに来たんだよ。」男は校庭の中央に刺さっている。青い杭を引き抜いた。その瞬間に生徒たちの悲鳴や奇声がなくなった「終わったの？」彼女は不安そうに男に尋ねた。男は首を横に振りながら「まだだ・・・・私は柱の一本を抜いただけだ。今から敵の本拠地に行く。君も来るか？」彼女は戸惑った。もともと自分はこの男を信用してない。その男とともに行動するのはかなり危険だろう。しかし、彼女は自分の親友を殺した犯人の顔が見たかった。そしてなんか一言言いたかった。「敵の本拠地に行けば結界は完璧に壊れるの？」「左様、それは私が保証する」男の顔は、嘘をついているようには見えなかった。「なら、私も行くよ」学校では見せたことのないような真剣な顔で男につぶやいた。男は彼女の顔を見て笑みを作り「よろしい。我名は、サオ・クロミア」と彼女の前で言い、軽く会釈した。彼女も会釈を返し「ミレリア・ハートンだよ。・・ミレリアでいいから」とミレリアはサオに自己紹介をした。「承知した。行くぞミレリア」男は後ろにいるミレリアにそう叫ぶと一人で歩いていった。ミレリアもサオを見失わないように後を追いかけた。

はじまりの出来事？（後書き）

今日からテストがほぼ一週間前です。
それでも書けたら書いてゆくつもりです

はじまりの出来事？（前書き）

テスト無理でした。
でも、小説は最後まで書きます
今回もかなりごり押しです。いつもすいません。

はじまりの出来事？

しばらくサオについていく校舎を出て、学校の裏庭によある古い建物に着いた。「ミレリア――ここはなんだ？」
サオは唐突にミレリアに尋ねた。「え……ここは旧校舎だよ」このクロスト高校には、旧校舎と新校舎の二つの建物がある。サオは旧校舎を一通り見て回ると勝ち誇った笑みを浮かべて「やはりこの結界を敷いた魔術師は秘匿性が甘い」サオは彼の言っていることがよく分らなかったみたいで「秘匿性？」とサオに聞き返した。「そう、秘匿性だよ。私たちの魔術は悪魔の叡智を行使する、本来なら理から外れた魔術を秘匿しなければならない。」そしてまた勝ち誇った笑みを浮かべ「また秘匿性が無いとほかの魔術師に気づかれるかもしれないからな」そう言うと、サオは旧校舎の扉を乱暴に開けた。
さっきまで威圧感のあった扉は甲高い音を上げて開いた。開けた瞬間にとても不気味な感じがミレリアを襲った。蛇に睨まれたような彼女が寒気で体を震わせていた。サオはそれが面白かったらしく「怖いのか？　ミレリア」からかうように言った。ミレリアは顔を赤くして「別に怖いわけじゃないんだから！　急に寒気しただけだから」言い返した。サオは苦笑いをしながら「冗談だよ。ここは敵の工房だ、常人なら怖がるのが当たり前だよ」「ならここは、敵の本拠地なの？」尋ねると、「有無、魔術痕跡的にもここが敵の工房だろう」「ここから、いろんなトラップがあるかもしれない。絶対私から離れるな！？」さっきみたい笑ってなく真剣な顔をして言った。その気迫負けたらしく「ハイ」とびっくりしたように言った。ミレリアはサオがこんな事を言うとは意外に思った。あんな冷酷な人なのに私のこと心配してくれてる、本当は……この人……とミレリア思った時、「伏せろ！？」サオは叫び、ミレリアを黒いコート抱きしめるように隠した。ミレリアは顔を赤くして「え…ええ」狼狽してると、サオは「静かにしろ！」ミレリアの口を手で塞いだ。口を

塞がれたミレリアは訳を分らずサオをほうを見た。サオはいつもの冷酷な声で「敵の使い魔だ」小さい声ミレリアの耳元で言った。最初は何を言っているかよく分らなかったが回りを見渡すと慎重2メートル位の二足歩行をする竜がすぐ1メートル位まで来ていることに気付いた。あまりにも突然で非常識な事が起こったので、ミレリアはまた声を出そうとしたが、すんでのところでまたサオに口を塞がれた。ミレリアは小さい声で「あれ、何……トカゲ……それともイモリ」あまりにも非常識な出来事が起こったのでアホみたいなことを言うと、「あれは翼竜（ワイバーン）だ！」サオは冷静にミレリアに言った翼竜（ワイバーン）、ドラゴンの仲間で使い魔のランクは最高クラスである。しかしドラゴンの仲間の中では知能は低く、ふつうのドラゴンみたい会話能力はなく、さらにとても凶暴なのでふつう戦うとまず返り討ちある。しかしサオは、そんな凶暴な使い魔相手にも、冷静に対応していた。敵はこちらに近づいているが気付いてない。敵は目で視覚でこちらを捉えてないのだ。なら嗅覚――いやならそれも最初からこちらに気づくはずだ。なら残されたのは聴覚の一つだけであった。幸い聴覚ならこちら音を立てなければいいだけの話である。ミレリアに「敵の使い魔は、音でこちらを認識している慎重に行くぞ」囁いた。ミレリアもそれに肯定したらしく小さく頷いた。しばらく旧校舎散策してると、ついに敵の本拠地に着いた。「ここで、本当に正しいの？」ミレリアは不安そうに聞いた。「うむ、ここだけ今までより、強く魔力を感じる。大方ここで間違いはないだろう」しかし、今までよりも魔力強さが異常である。最初は罠だと思ったが、今までの人払いの結界や校舎に張った結界みたいな雑な結界を作るものである。罠を心配はないと、確信すると「ミレリア――行くぞ」ドアを開けた。部屋には、たくさん楽器や肖像画が飾ってあった。「ここは、どうやら音楽室みたいだね」ミレリアは回りの楽器などをみて呟いた。その時、「！？」　強い魔力の気配を感じた。一人の男が立っていた。男は二人を見下しながら「お前らか、私の儀式を邪魔した不届きものは！」不愉快そうに言った。「じゃあ、あな

たが私たちの学校に結界を敷いたんですか？　クロルア先生！」ミレリアは信じられないという顔で男を見ていた。男はそんなミレリアの顔を笑いながら「そうだよ、ハートン君――私だよ」この男はクロルア・マクス、金髪でとても暗い顔をいつもしている人で、いつも校長にペコペコしていてたのでミレリアは小物だと勝手に決めつていたので、こんな事を起こすなんて思っていなかった。「クロルア……あのマクス家の一族か？」マクスは魔術の一族の中でもかなり名門である。「先生なんで、こんなひどい事を」いまだに信じられないという顔でクロルアを見た。

しかし、クロルアにとってミレリアはどうでもいい存在なので無視した。問題なのは……あのミレリアの隣にいる黒いコートの男だ。自分の結界を破壊し、また工房の設置した使い魔に見つからずここまで来た。あれは、一流の魔術師だ。「貴様、何者か」と尋ねた「私は、サオ・クロミアだ。！」サオはクロルアに言った。サオ……協会でも指名手配されてる魔術師でそんな男がいたはず……クロルアは小さく笑みを浮かべた。この結界を破壊した男はもちろん始末するさらにこの男の体に刻んである。魔術回路を協会に提出することで協会とのパイプも作れる。これなら一石二鳥だ。ならさっそく「貴様、人の儀式をぶち壊した以上それなり覚悟はできてるんだろうな！？」クロルアは指揮者のような素振りで手を挙げると急に音楽室の楽器が鳴り響いた。「さぁ、貴様にささげる狂想曲（カプリチオ）だ。」

第二幕の戦いの始まった。

はじまりの出来事？（後書き）

また、書きますので読んでください。
感想をいただけるとありがたいです。

はじまりの出来事？（前書き）

ごめんなさい
投稿遅れました

はじまりの出来事？

音楽室にある弦楽器や管楽器が自由気ままに流れる様は確かに狂想曲（カプリチオ）だった。この曲がただの曲ならサオたちも優雅に音楽を集中できただろう。しかしサオの魔術回路は、この曲がクロルアの魔術だとすぐに察知した。サオも敵の魔術に対抗するために魔術行使しようとした時、天井から甲高い人間離れした声が聞こえた。

「え……何なの！！！　この音」

ミレリアが耳を塞ぎながら言った。

天井から現れたのは、この工房を守っていた翼竜（ワイバーン）だった。さらにクロルアの近くから琥珀色の魔法陣が現れいくつもの翼竜（ワイバーン）が召喚された。

「さぁ――化け物どもこの聖域を穢した愚か者を駆逐しろ」クロルアが甲高い声を張り上げた。

クロルアの翼竜（ワイバーン）は、天井から二頭さらに召喚された翼竜（ワイバーン）は四頭……合わせて六頭の使い魔がサオたちを睨みつけていた。

本来、使い魔というのは、一体から二体を召喚するので、限界である。まして最高ランクの翼竜（ワイバーン）は、召喚させるには、かなり量の魔力を消費するため、どんな優秀な魔術師でも一体しか召喚出来ない。

しかし、クロルアは、さっきの体育祭で生贄にした生徒たちの魂がある。この魂の魔力のおかげで大量の翼竜（ワイバーン）を召喚することが出来たのだ。

一体の翼竜（ワイバーン）が二人にめがけて熱い灼熱の炎のブレスを吐きだした！

しかし、サオの動きも早かった。コートの内ポケットから二本の試験管を取り出し、二本とも地面に叩きつけた。試験管からあふれ出した。液体は、空気に触れた瞬間スライム状の個体になりひとつはミレリアを庇うように皿状になり、翼竜（ワイバーン）の炎のブレスを凌いだ。さらにもうひとつは獣の形になり、攻撃してきた翼竜（ワイバーン）の喉元に食らいついた。ブレスを吐いた翼竜（ワイバーン）は必死に首に付いた獣の形をしたスラ

イムを解こうとジタバタしていたが急に停止した。傷は最強ランクの生命を奪うような強力な攻撃ではない。しかし、クロルアはすぐにその理由に気付いた。
「私の使い魔の魔術を吸収しただと……」
そう、これこそサオの得意とする魔導書記（まどうしょき）……人口？獣（オバールアニマル）である。試験管にある液体を自分の好きな属性の魔力を補充させて好きなものに擬態させることができる。さらに敵の魔力を吸収するのだから厄介このうえない
例えば、さっきミレリアを庇った皿状の液体は敵の炎ブレスから守るため、土属性の魔術で出来ている。
「我が血統よ……擬態せよ」
サオが呪文を唱えるとミレリアを庇ってた液体が皿状から獣に擬態した。
クロルアはそんなサオを忌々しく見て
「貴様、私の儀式の邪魔までして……なおかつ儀式で得た貴重な魔力を奪うなど――断じて許さん」
クロルアは右手を指揮者のようにうえにあげると、さっきまで流れていた曲の急にテンポが変わった。ものすごく激しい狂ったようなリズムなり、引いてる楽器も甲高い音を出し、次々に弦がむき出しに楽器が壊れていった。
それは音楽というより崩壊である。
さらに、変わったのは、音楽だけではなかった。クロルアの使い魔……翼竜（ワイバーン）が急に凶暴になった
その時、サオはやっと理解した。
「お前の魔導書記（まどうしょき）はその曲か……」
苦虫を噛んだようにサオが呟いた。
「そうさ――我が秘術凶気の音楽祭聴（マインドジャックコンサート）いたものをすべて思い通りに操る暗示術だよ」愉快そうに言った。
「ミレリア君……君をこのような事に巻き込んですまなかった。」
ミレリアの前で軽くお辞儀をした――しかし顔には笑みがこぼれて

いた。
「しかし、君には私の秘術を見られてしまった。残念ながら君にも死んでもらうよ……恨むなら君をここに連れてきたあの魔術師を恨むがいいよ！」
「怖……怖くなんかないから！　サオさんが先生の事を倒すから……全然怖くないよ！」
れえてる足を押えながらミレリアは負け路と大声で叫んだ。
クロルアはその姿を憐れむように見ていた。曲の音が大きくなった……それが合図だった。
たくさんの翼竜が怒り狂ったようにこちらにしかけてきた。
ミレリアは怯えてサオの後ろに隠れた。この絶対絶命なかさすがのサオも荒々しく唱えた！！
「我が血統よ……防御せよ」
サオが呪文を唱えると人口？獣（オバールアニマル）の液体は個体化してサオたちをボールのように包みこんだ土属性で作った防壁……しばらくは敵の攻撃を防げるだろう
ミレリアも安心したのかさっきよりも表情が明るくなった。
「これで……しばらくは安心だね」とサオに呟いた。
しかし――サオの表情はミレリアとは対照的で険しくなっていた。
ミレリアもそれに気付いたらしく心配そうにサオの顔を覗いた。
「どうしたの？　サオさん？」
「逃げろ――ミレリア！！！」叫んだ
次の瞬間さっきまで二人を守っていた心強い防壁は粉々に崩れてしまったのだ！？
クロルアは防壁から二人が出てきた瞬間、旧知の友に会えたような歓喜に満ちた顔で笑った。
「やっと出てきたか――コソ泥が今から二人まとめて獣の餌になれ」
「私はコソ泥なんかじゃないよー」ミレリアは半泣きなりながら訴えた。
しかし、クロルアはそのミレリアの話を軽く無視し、また右手を振

り上げた。今度は楽器が次々と壊れていき――音楽室の壁も次々亀裂が入っていった。誰もが耳を塞ぐような大音量の音――そう、これこそがクロルアが体に刻みこまれている魔術回路をフル活用していることで使える最大限の魔術である。
「せっかくだし――最高の技で君たちを殺してあげよう」
クロルアの翼竜（ワイバーン）たちもさらに凶暴性が増していた。
この絶対絶命ピンチ……ミレリアは恐怖で失神していたが……サオは冷酷に笑っていた。
クロルアはそれが気持ち悪く面白くなさそうな顔をした。
「何がおかしい――サオ……それとも死が恐ろしくて狂ったか！？」
それを聞いた瞬間また可笑しそうに笑みを浮かべていた。
「別に、ただお前の骸姿を想像したら笑い止まらないだけだよ」と冷たく言った。
「ついに狂ったかサオ……獣どもよ奴を食らえ！」震えるように叫んだ。
しかし―サオは不敵に笑みを浮かべクロルアのように右手をあげた……右手には黄金色の籠手がついていた。
「其は……神に裁きを与える悪魔の槌！」
呪文を詠唱すると大きな雷が鳴り響いた……雷の音のほうが大きく曲の音をかき消した……サオは音で暗示をかける魔術に音で対抗して無力化したのである！
「お前のおかげだよクロルア……お前が最高の音の大きさを知らないとこの賭けには出れないからね！」
サオは不敵な笑みをクロルアに見せた。
クロルアは理解した。
自分の秘術が敗れ使い魔が機能しないことを……そして自分はこの目の前にいる魔術師に殺されること。
サオは冷酷に機械の作業のように無表情で黒いコートから新しい人口（オバール）？獣（アニマル）の試験管を取り出し地面にたたきつけた。
「我が血統よ……喰らえ」と呪文を唱えた。

それがクロルアが聞いたサオの最後の言葉だった。

はじまりの出来事？（後書き）

なんか、バトルシーン書くの滅茶苦茶大変でした。
感想などお待ちしております。
後、少し書き方変えてみたから読みにくかったらそれも感想でお願いしますm（__）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5354y/

魔導書の門番

2012年1月4日07時47分発行